
目指すはハーレムエンド

鷺崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指すはハーレムエンド

【NNコード】

N9771Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

世界最高峰の企業、鳳凰院グループ。企業は数十人の人々を集めた。理由は一つ。鳳凰院グループのトップとなるものを見つけるため。

その条件は親友以上、または恋人以上となる者を作りまくれ！
と言つことだつた。

和泉優太は、そんな中目指す。
ハーレムエンドを。

プロローグ

大きな一室に何十人もの人間がなぜか同じ仮面を付けて呆然と立っていた。

その何かの会場の様な部屋は電気を切つていてるために、はつきりとお互いの顔が見えないのだが、体つきを見るかぎり男と女が約四対六の比でいるようだ。

辺りがざわざわしている中、突然、舞台のような他よりはいくらか床が高い場所にスポットライトが当てられた。

「レディース・アーノド・ジェントルマン！」

それにオッサンもオバサンもガキンちよも、こくんちくにはく。
私は世界最高峰と呼ばれている企業、鳳凰院院グループの単なる平社員の、片代伸吾と申します。

本日はこの場の司会を任せられております。
どうぞよろしくお願ひ致します、「

そうふざけた態度で登場してきたその男性は、黒いスーツ姿に黒の短髪、糸目が特徴的であった。

片代は、周りが更に騒つく中、上辺だけの笑顔をがざして話を続ける。

「皆さん、お静かに。

黙らないと鳳凰院グループの力であなた方の人生メチャクチャになりますよ？」

片代は馬鹿にしている様に言つが、実際に鳳凰院グループの力を持つてすれば、そんなこと等容易くできることは今の時代、子供でも知っている。

だが、

「ふざけんじやねえぞっ！！

「おとら、いきなりこんな場所に連れてこられたんだ！ 平社員なんかお呼びじやねえんだよっ！ もつと上のヤツ連れてこいや！」

！」

と前方から若く、荒々しい声が部屋に響いた。
どこにでもこうじつた輩やかみがいるのも確かな事実である。
しかし、そこで

「バチッ！！
「がつ！…」

そんな音が聞こえた。

そのせいで、辺りが静まり、そんな中、片代は再び口を開いた。

「ありがとうございます。ようやく静かになりましたね。
さて、では本題に入りましょう」

片代は何もなかつたかの様に上辺だけの笑顔を振りかざしている。
そのことが余計に人々を恐がらせる。

「ますですね。

鳳凰院グループのトップになりたい人は手を挙げましょー！」

この部屋にいるほとんどの人の頭の中にはクエスチョンマークが浮かんでいた。

何でそんなことを聞くのか、と。

「…皆様、なりたくないと言つてよろしくでしょうか？」

片代が問い合わせると、一人、二人と手を挙げ、それが開始の合図となつたかの様に最終的には、おそらくハ割以上の人々が手を挙げていたのだろう。

「では、なりたくない方々は『帰宅』していただいて結構です。

一番後ろの扉から出てくださいされば、社員が皆様を家までお送り致します

さよなら～」

そして、片代は笑つて何句かを送り出した。

「さて、皆様は突然ここに呼ばれて訳ですが、これからある試験を受けてもらいます」

再度、どよめいた空気になる。

「皆様、お静かに」

今度は一瞬でピタリと部屋から言葉が消えた。

「ありがとうございます。これから説明をしようと思ひますが、長々となることを承ります」

誰も喋らない。

口を開くのは片代ただ一人。

「まず、皆様には『天城市』^{あまきし}と言つ土地に引っ越ししていただけます。理由としてはそこが鳳凰院グループが一番干渉しやすい土地であるからで」

仕事や学校、家庭といった事はこちらでいくらでも援助致しますので、ご安心を。

次に何をするか、ということです。

皆様方には一年間、より多くの人々と交友を深めていただきたいのです。

何が言いたいのか分からない人がほとんどですね？

代々鳳凰院家の当主、グループのトップになるための条件は人身掌握の術すべが誰よりも長けていることです。

オブラーートに込んだ表現をするなら最高のカリスマ性を必要とする、と言ったところでしょうか。

知識は後からでも身につきます。鳳凰院グループなら無理矢理にでも植え付けられます。

ですが、カリスマ性は多少の成長があつても、先天的な部分が大きいのです。

それゆえに、この試験を受けていただきます。

それではルールの説明をいたします

そこで片代は、一旦言葉を切った。

ただ、話しつづけていたため、息を整えようとしたのだろうが、その静寂が他の受験者とでも呼ぶべき人々をより緊張させる。

「まず、交友を深めると言つてもどの程度深ければよいのか、についてです。

同姓なら親友以上。異性なら恋人以上になります。

言い忘れていましたが、これは得点制です。

親友の、恋人のスペックが高ければ、高い程の高得点になります。判定はこちらで公平に行います。

何をもって公平に？

と言いますと、我々がその親友なり、恋人なりの過去と現在を全て洗いざらい調べ尽くすことをもって、公平と言わしていただきま

す。

人数は何人でも可でございます。

親友だろうが、恋人だろうが、

また、恋人以上に限つた話なのですが、他人から奪つたら一倍の得点となります。

ルールはその程度と、申し訳ありません。また一つ言い忘れていました。

それはですね、その時点で獲得しているポイントを使って、我々鳳凰院グループの援助を要請することができる、と言うことです。物資であろうとも、人を使つての調査だろうとも可能です。

そして、最終的に得点が一番高い人が見事、鳳凰院グループのトップです。

これまで何か質問はございませんか？

分かりきつた質問は『排除』させていただきますが

多くの者がその『排除』と言つ言葉が何を意味しているのかが分からない…いや、僅かに分かつてしまつから、受験資格の剥奪であろう、と思つてしまい、聞きたいことは山ほどあるけれど質問をしない。

その中に、一人、いや二人、男と女が一人ずつ、高々と手を挙げた者がいた。

「はい。まずはそこの貴方。どうぞ」と、片代は女の方に向けて言つ。

「ど、どうして私たちが選ばれたのですか？」

女は若い声ではあるが緊張でガチガチとなつた声を振り絞り、周りの皆が思つていることを尋ねた。

「ああ、また伝え忘れていました。忘れっぽくて申し訳ありません」

片代は謝るもの、口調はふざけた、軽いものだった。

「それは鳳凰院グループ現当主が重い病やまいを患つてしまつたのですが、現当主には世よ継つぎがないため、鳳凰院家初代当主の血を引く皆様、六人去つたので、二十八名の中から適格者を見つけだし、継がせよ」と言つことになつたからでござります」

受験者は皆驚いている。

自分達が鳳凰院の血を引いていたことに気がつく。

「まつたく、今時血がどういづ、と古臭いのですが、それで世界最高峰と呼ばれるまでに成長したのですから文句は言えないのですがね。

あ、私文句言つましたね。これは失礼。

では、そちらの貴方もどうぞ」

片代は言つた。

男は楽しげな口調で質問する。

「それって、堂々とハーレム田指していいんですね？」

『…………』

誰もが声を出さない。

受験者達はこの雰囲気の中、笑つて、馬鹿にしても良いもののか、と。

片代は…よく分からない。

初めは呆れているだけかと思われたが違つた。
なぜなら

「ふつ、ははははははははっ！……」

大爆笑していた。

「いい！ 貴方いいですよ！！ 非常に面白い。まさかこんな質問がくるとは思いもよりませんでしたよ。ええ、ええ、結構です。存分にハーレムを用意して下さい」

片代が笑つても受験者達は笑えない。
反応に困っている。

「ふうー。いや、笑いました。

他に質問のある方はいませんか？

……いないようなら、これにて終わりとします。

最後に、皆様、法律は守りましょうね。

それでは

そう言い終えると、片代は防護マスクの様なものを装着する。
と同時に白い煙がどこからともなく部屋に充満し始め、受験者達は部屋に悲鳴を響かせていた。

「それでは、皆様、良い夢を」

試験開始直前

俺こと、和泉優太いすみゆうたは見知らぬ部屋の、見知らぬベットの上で枕元に置いてあつた目覚まし時計によつて目を覚ました。

時刻表ちょうど午前五時。

「……ふむ、昨日のは夢ではない、と」

俺は昨日の回想を軽一ぐする。

昨日は学校から帰つていると、いきなり黒服の大男達に拉致られちつた。

まあ、おもしろそうな一年にしてもらひえりっぽいからいいんだけどな。

はい、終わり。

そうだ。ここが天城市つてところなんだよな？

そう思いながら、俺は窓の外を眺める。

高っ！！

ここはマンションの一室だつたらしい。それもかなり高い階層の。

この窓から見て目立つ建物は一つ。
一つは鳳凰院グループの本社。

バカでさえ、の一言に呑める建物だ。

鳳凰院グループとは漁業、農業、医療、重工業、軽工業関連等、数知れない部門で世界のトップに立ち、また、日本の議員の約三割は鳳凰院グループと繋がりを持っていると言われている。

日本は実質上、鳳凰院グループが治めている、との噂も流れている程の企業だ。

話は戻るが、もう一つの建物は白代学園^{はくじやく}。

そこは、中学から大学までエスカレーター式になつており、さらに今日本で一番学生数（中学、高校、大学のそれぞれ）が多い学校。

ちなみに学力は国内だけ見ると、上の下から中と言つたところである。

そして、俺は窓から離れ、部屋の中にある机を見る。
その上には一通の置き手紙があつた。
俺はそれを開き、そして田を通す。
内容はこうだ。

『まず、このよつな非礼をお詫び申し上げます。

と、堅つくるしく言わなきゃダメなんだけどいいよね？
はい、どうも片代です。

昨日からずっと君のことが気になつて（笑）。

質問のことだよ。変な勘違いをしないでね。

じゃあ早速でだけど、いくつか説明があるんだ。

「ついでに、同封している見取り図はこの部屋のものだよ。1LDKの快適な部屋だね。

もう一つの同封している地図は、この天城市周辺のもの。赤く塗られているのが、君の部屋『

つむ、悪くない場所なんだが、ここはフレンドリーすぎじゃないか?』

『また、君は今日から由代学園高等部に編入してもらいつよ。関連書類は全て学校に送っているから大丈夫。後は到着後、職員室に向かってくればOK』

…なんかイラッとするな…

てか、俺の学力だと由代は厳しいんだけど…

『お金の方は、君は食費だけ気にしどいて学費や光熱費、電気代とか諸々は、こっちが受け持つから安心して。ちなみに、一ヶ月に五万円の支給されるから』

一ヶ月に食費が五万円か。
かなりの金額を遊びに使えるな。

『他に服とかは持つて来てあげたよ。全部玄関にある段ボールの中

だから。

あ、白代の制服だけはクローゼットの中にあるよ。

それと、試験資格は十一歳から三十九歳のため、四十三の君の父親と四十一歳の母親は試験は受けられないんだけど、君の一人暮しは許してくれたよ。

その際に言伝を預かってるんだ。言ひつよ。

「優太、父さん達を楽させてくれよ」、「優ちゃん。隠し場所つて大切よね」だって

……父さんは、適当だけど一応は応援してくれてるんだろうが……母さんは何が言いたいんだ？

『最後に一言。

君の性癖は私には分かりかねます』

…………バ、バッキヤロー————!!

こいつ俺の秘蔵コレクションを見たんだな？ 見たんだよな！？

見てしまったんだな！？

何してんだよ！？

そりゃ！

母さんが言つてた「隠し場所」つてのはこの……？

待てよ。母さんが知つてゐつて！」とせ

…………み、見られた————!!

ヤバイ！ ヤバイぞ！ これは非常にヤバイ！！

もう本当に顔が合わせられないぞ……

と俺が嘆いでいると、手紙の一一番下にまだ何か書いてあつたのが見えた。

俺は萎^なえた心で一応見てみる。

『追伸

君のお母様のじき要望により、それらの雑誌は全て処分しました（笑）』

（笑）じゃねえ————！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9771z/>

目指すはハーレムエンド

2011年12月31日16時48分発行